平成２９年度

函館市学習状況調査実施報告書

～最後までやりきる指導を函館のスタンダードに～

函館市教育委員会

函館市学力向上プロジェクト推進委員会

刊　行　に　寄　せ　て

中央教育審議会における第３期教育振興基本計画審議において，「激動の時代を豊かに生き，未来を切り拓く人材を育成するためには，これまで同様の教育を続けていくだけでは通用しない過渡期にさしかかっている」ことが取り上げられました。

国際的な調査によると，全国的に，学ぶことと自分の人生や社会とのつながりを実感しながら，自らの能力を引き出し，学習したことを活用して，生活や社会の中で出合う課題の解決に生かしていくという面に課題があると考えられております。本市におきましても，今年度の全国学力・学習状況調査において，「授業で学んだことを，ほかの学習や普段の生活に生かしていますか」という質問に肯定的に回答した児童生徒の割合は低い傾向が見られ，全国と同様の課題があると捉えております。

昨年３月に告示された新学習指導要領では，児童生徒に未来を切り拓く資質・能力を育むために，「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善の取組が求められており，函館市教育委員会では，「アクティブ・ラーニング推進事業」において外部講師を招聘した研修会や，各学校の校内研究担当者による協議会を開催し，授業改善や校内研究の活性化に向けた取組を進めてまいりました。

本報告書では，推進事業の中心となって取り組んできた先行実施校や研究モデル校，中核教員による授業改善および校内研究の活性化に向けた手立てなどを特集として掲載しております。

各学校におきましては，本報告書を活用し，子ども自身が人生や社会の在り方と学びを結び付けて理解を深め，授業で学んだことを，ほかの学習や普段の生活に生かしていくような質の高い学びを実現する授業改善の取組が推進されるよう期待しております。

本報告書の刊行に当たって，校長会および教頭会をはじめ，市内各小・中学校並びに「アクティブ・ラーニング先行実施校」「函館市学力向上プロジェクト推進委員会」の皆様には，多大なご協力をいただいたことに対しまして，心からお礼申し上げます。

平成３０年３月

函館市教育委員会
教育長　　辻　　俊　行

特集　質の高い学びの実現をめざして

１　アクティブ・ラーニングの視点による授業改善

国　語

導　入

Ｑ１　関心や意欲を高めるにはどうしたらよいですか。

目的意識・相手意識をもたせ，やるべきことを意識させましょう。

言語活動の設定

○　身に付けさせたい力を育むことができそうか，子どもの興味・関心は生かされているかを考え，言語活動に結び付けましょう。その際に，言語活動の目的意識・相手意識をどのようなところに置くかも吟味し，子どもにその言語活動の意義を実感させましょう。

単元の見通し

○　単元を通しての見通しをもたせ，どんな力をこの単元で身に付けるのか，何のために，誰に向かって「読むのか」「書くのか」といった目的意識・相手意識をもたせることが大切です。学習の目的意識・相手意識がはっきりすると，どのような学習をしていけばよいかが明らかになり，子どもたち自身がやるべきことを意識して学習が進められるようになります。

○　目標の実現のために，必要な学習とその順序を子どもたちと確かめましょう。どの単元でも，学習計画を教師が一方的に示すのではなく，子どもたちにアイディアを出させ，足りない部分は教師が助言するようにするなど，見通しをもたせる時間を設定することで，自ら学習に見通しを立てる力を育てましょう。

学びの構え

○　虫食いの例文を提示したり，いくつかの例文を示し，共通点やきまりを見付けて分類させたりするなど，問題提示を工夫し，子どもに「やってみたい」「できそう」という思いをもたせましょう。

身に付けさせる資質・能力，興味・関心，目的意識・相手意識が含まれた言語活動
【例】
○　小学校３年国語　「きせつの言葉を集めよう　ー春・夏・秋・冬ー」
【言語活動】「みんなの歳時記を作ろう」

「みんなの歳時記を作ろう」という言語活動を位置付け，身の周りの言葉から季節を表す言葉を集めたり，季節に注目しながら俳句を詠んだりする活動を通して，子どもが自分たちで集めた季節を表す言葉が俳句作りの中で生かされる喜びを感じたり，同じ季語を使った俳句でも様々な捉え方，表し方があることを知ったりするとともに，より一層俳句を詠むという文化を楽しむことができるようにする。

（Ａ・Ｌ研修会１２　国語科授業より）

展　開

Ｑ２　課題解決の手掛かりにどのように気付かせますか。

モデルを提示して，ポイントをつかませましょう。

本時の見通し

○　本時の学習が単元のゴールとどのように結び付いているのかを明確にし，既習事項を活用できるか等，学習の見通しをもたせましょう。

モデルの提示

○　子どもが望んだ時にモデル（例文等）を提示し，モデルを読み手（聞き手）として読ませ（聞かせ），気付いたことを出し合う中で，言葉の意味，働き，使い方等を吟味させましょう。また，さらにこうした方がよいという意見があれば出させ，よりよいモデルを子どもと共につくりましょう。

○　教師自身，視点をはっきりともち，「～さん，素敵なことを言ったね」「～さんの表現を見てごらん」等の声掛けを通して解決の手掛かりを示しましょう。

Ｑ３　学び合いをどのように深めますか。

学び合いの目的を明らかにし，子どもの考えをつなぎましょう。

対話

○　授業のねらいに向かって，互いの知見や考えを広げたり，深めたりする対話を設定しましょう。

○　子どもたち同士で互いの構成や表現に着目して読み合い（聞き合い），自分の考えを改めて自覚したり，友達の構成や表現からよさを見付け，自分の文章等に生かしたりすることができるようにしましょう。

○　子どもの呟きは学習材になるという意識をもち，呟きの内容を掘り下げるなど，子どもの呟きに応え，学びを深めるようにしましょう。

○　一人が表現したときに，「あなたはどう思う？」「今どう思った？」と問い返すなど，周囲の子がどのようにその表現を捉えたのか確認することを通して，思いや考えを深めさせましょう。

○　「きまりを見付けて，並べ替えてみよう（２つに分類してみよう）」等の制限を設けて考えさせることにより，子どもの思考を促すとともに，その時の自然な対話が，授業のねらいに向かっていくように，教師は子どもの考えをコーディネートしましょう。

終　末

Ｑ４　振り返りでは何をすればよいですか。

本時の成果を振り返り，次の学習や生活に生かすことを意識させましょう。

まとめ・振り返り

○　教師の「本時で身に付けさせたい力」に目を向けることができるようにキーワードを設けることで，理解した言葉の使い方のポイント（知識・技能），大切な考え方（思考力・判断力・表現力等），どのような気持ちや姿勢で学ぶことが大切だと考えたか（学びに向かう力・人間性等）について，価値を実感しているものを中心にまとめさせる。

○　その上で，今後どのような学習をしていきたいかについても考えさせ，授業で身に付けた国語の力を，実生活に生かしていこうとする姿勢を価値付ける。

○　子どもの学びの記録から，子どもの学びを把握し，次の指導へ生かす。（ノート，記述等，子どもが表現したものを蓄積する。）

小学校第５学年　国語科学習指導案

単元名「敬語」（本時：２／２）

指導案の視点

【視点１】主体的な学び

○　学習への興味・関心を高める工夫

一学期の宿泊研修で実際に敬語を使ってみた経験と，今後，学芸会や修学旅行など敬語を使う機会が増えることなどから，敬語の必要感を感じさせるとともに，その大切さと難しさを考えさせ，目的意識をもって学習に取り組めるようにする。

○　学習したことを振り返り，次の学習へつなげる工夫

学習の振り返りにおいて，キーワードを示してまとめさせることにより，学んだ事を価値付け，今後の生活において実際に使ってみようという意欲につなげていく。

【視点２】対話的な学び

○　共に課題を解決し，考えをつくり上げる工夫

答えを二択にしたり，分類して考えさせたりするなど，全員ができそうだと思えるような発問をすることで，一人ひとりが自分の答えをもてるようにする。全員が自分の答えをもっていることから，お互いの答えの違いに気付き，なぜ違っているのかに興味をもつことで，自然に対話へとつなげていきたい。そして，対話を通して正しい答えについて考える中で，相互に影響し合い，少しずつ論理をつくり上げていくような授業を構築したい。

【視点３】深い学び

○　知識を獲得し，活用するための工夫

子どもは今までの経験からある程度の敬語の知識をもっている。その知識を相互に関連付けて，敬語のはたらきや種類を学ぶことにより，今まで以上に敬語を使って会話をすることができるようになる。しかし，場面や相手に応じて敬語を正しく使えるようになるためには，自然に使っていた敬語の使い方を文章の主語を考えて使い分けるなど論理立てて考えることが必要となる。また，クイズを作る等の，より深い理解が必要な学習を行うことにより，実際の場面においても正しく敬語を使えるようになると考える。

本時案

（1）　目　標

・敬語を使う場面や使い方に関心をもち，その使い方について考えようとしている。　【国語への関心・意欲・態度】

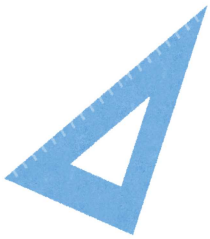
・日常よく使われている敬語の使い方に慣れるとともに，相手や目的に応じて適切に敬語を使い分けることができる。

【言語についての知識・理解・技能】

（2）　展　開

学習過程	児童の活動	教師の関わり	評価規準（評価方法） ※努力を要すると判断される児童への手立て
導入	○　敬語を使ったクイズについて考える。 ○　前時に学習した敬語の種類について確認し，クイズに尊敬語と謙譲語のどちらが使われているか考える。 ○　敬語には使い方の決まりがあることを知る。	・丁寧語だけを使った文と，謙譲語も使った文を提示し，どのように感じるか考えるよう促す。 ・丁寧語の使い方について振り返る。 ・敬語の種類について振り返り，クイズの文には尊敬語と謙譲語のどちらが使われているか予想させる。 ・予想した理由を確認することで，敬語の使い方には決まりがあるのではないかと考えさせる。	＊感覚的に尊敬語か謙譲語かを決めるだけでよいことを伝える。
	尊敬語と謙譲語の使い方の決まりを見つけよう。		
展開	○　６枚のカードが，それぞれ尊敬語と謙譲語に分けられるように相談しながら考える。 ○　正しく尊敬語と謙譲語に分けられるように相談しながら考える。 ○　主語というキーワードから尊敬語と謙譲語の使い方の決まりを考える。 ○　主語が身内の時に使う敬語を考える。 ○　わかったことをまとめる。	・多数決を採り，黒板にある６枚のカードを尊敬語と謙譲語に分ける。 ・全体の正解数を伝え，相談させながら全問正解になるまで繰り返す。 ・学習カードを配布する。 ・児童の発言から尊敬語と謙譲語の使い方の決まりをまとめる。 ・主語が身内で，尊敬語と謙譲語を使った文を提示し，どちらが適切か考えるよう促す。	［関］敬語を使う場面や使い方に関心をもち，その使い方について考えようとしている。 （観察） 視点２　考えを創り上げる ＊文の主語に着目して考えることを伝える。 ［言］相手や目的に応じて適切に敬語を使い分けることができる。 （観察・学習カード）
	尊敬語と謙譲語は主語によって使い分けが必要であり，主語が自分や身内の時には謙譲語を，主語が相手の時には謙譲語を使う必要があることがわかった。		
	○　国語リーダーが中心となり，尊敬語か謙譲語かを考える問題に取り組む。 ○　主語によって使う敬語を考えて学習カードの問題を解く。 ○　敬語クイズを作る。 ○　班でクイズを出し合い，正しく問題ができているかを確認する。	・例文で使われている敬語が尊敬語か謙譲語かを判断する問題を提示する。 ・どうしてその敬語を使うのか，説明を考えるよう促す。 ・早く終わった児童には，他の敬語クイズの問題に取り組むよう伝える。 ・主語と述語の関係を確認する。 ・クイズの正解文と説明文が正しく書けているかを確認するよう促し，敬語の決まりの理解を深めさせる。	＊敬語の一覧表を配布し，活用するよう伝える。 ［言］日常よく使われている敬語の使い方に慣れるとともに，相手や目的に応じて適切に敬語を使い分けることができる。 （観察・学習カード） 視点３　知識を獲得し活用する
終末	○　学習を振り返る。 ○　次時の学習を確認する。	・本時の学習を振り返り，できるようになったことを「主語」という言葉を使って自分の言葉で表現するよう促す。 ・今日の学習の振り返りを交流する。	視点１　次の学習へつなげる ［言］相手や目的に応じて適切に敬語を使い分けることができる。 （学習カード）

算数・数学



導　入

Ｑ１　関心や意欲を高めるにはどうしたらよいですか。

子どもの「やってみたい」という思いを引き出しましょう。

問題の工夫

○　問題の中に興味をもてるような仕掛けを入れて，算数・数学の世界の中で「あれ！」「おかしい！」「なぜかな？」といった「ハラハラ，ドキドキ，ワクワク」する気もちを引き出し，子どもたち自らが「問い」をもち，積極的な関わりをもちながら学習を進めるようにしましょう。

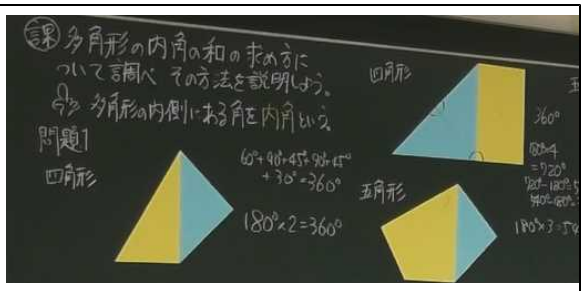
提示の工夫

○　ありふれた題材から数学的な要素（規則性など）を取り出したり，既習の事柄を活用できそうだと気付かせたりしましょう。

問題の工夫・提示の工夫

小５
「変わり方しらべ」→

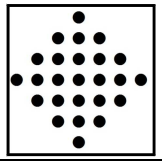
中２
「平行と合同」→



小４「計算のきまり」

はじめはチラッと見せ，徐々に見せる時間を増やしていく。　→

※　教科書の問題も，見せ方を工夫すれば…



中１「方程式」

わざとおかしな答えになる問題を解かせて，気付かせる。

→　「○○くんは，スーパーに買い物に行きました。
１個 200 円のお菓子を何個か買って，1500 円を出したら，おつりは 400 円でした。…」

展　開

Ｑ２　見通しをもたせるためには何が大切ですか。

既習事項を活用させ，見通しをもたせましょう。

見通し

○　課題を提示して，すぐに答えさせるのではなく，「きまりがありそうだ」「○○ならできるのにな」とこれまでの学習を当てはめて，課題を解決する上で，有効に働きそうな，既習事項，考え方，表し方などの方法を考えさせましょう。

○　前時までの振り返りの中に問題解決のヒントを入れたり，教師の発問で既習事項を活用できそうなことを気付かせたりすることで，解決への見通しを考えたり，答えの見当を付けさせたりしましょう。

Ｑ３　個人で考える時間の差をどうしたらよいですか。

考えている途中でも，時間で区切りましょう。

個人思考

○　自力での気付きを大切にし，自分の考えを友だちに伝えたくなる必然性をもたせましょう。

○　自分の考えをノートに書かせ，立場を明らかにさせ，「自分の考えが正しいかどうか知りたい」「分からないから，友だちの意見を聞きたい」など，自分の力で問題を解決しようとする目的意識をもたせて話し合いに臨ませましょう。

○　個人や小集団での解決は，最後まで解くことができなくてもよいとおさえ，時間を取り過ぎたり，教師が丁寧に指導し過ぎたりしないようにしましょう。

Ｑ４　交流で，子どもの発言をつなげるにはどうしますか。

「同じです」「いいです」で終わらせないようにしましょう。

全体交流

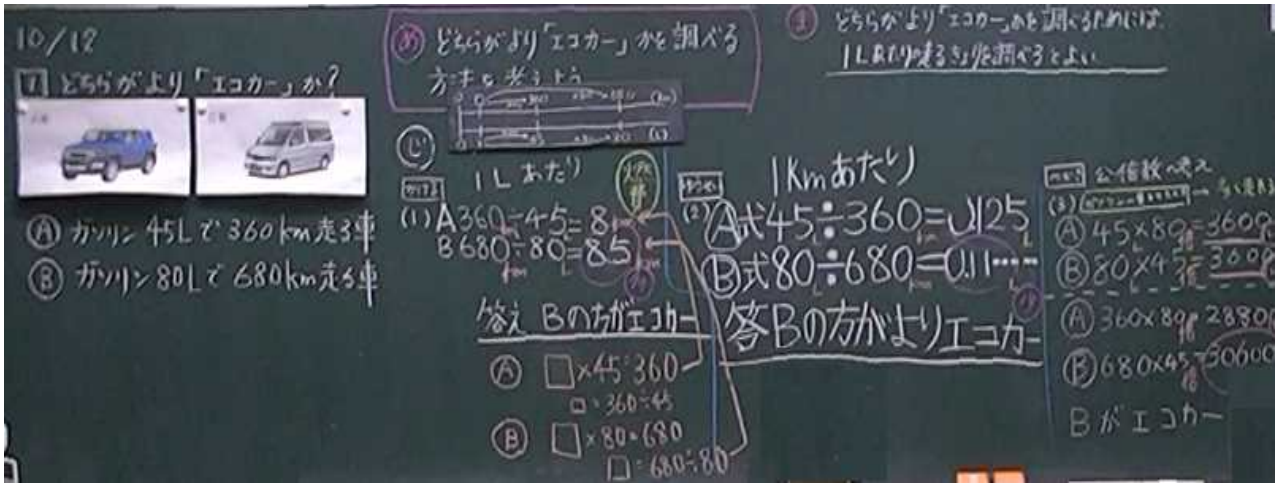
○　子どもの発表の後に，教師は丁寧に解説し過ぎないようにし，教師自らが「難しくて分からない」「答えが違いませんか」「他の言い方ができるかな」などと問い返しを行い，子どもたちの話したいと思う気持ちを高めるとともに，本時のねらいについて理解を深め，説明する力を育てましょう。

○　「えっ」「本当？」「絶対？」と教師が投げかけ，子どもが立ち止まって考え，「だって～」と理由を考えさせることにより，理解を深めさせましょう。

○　自分の考えと比べることができる場をつくり，多様な考えを，より簡単，よりすっきり，よりはっきり，いつでも言えるといった観点から比べ，算数・数学のよさや美しさを感じさせましょう。

○　悩んだり，考えたりした子どもの考えの過程を板書し可視化しましょう。正解だけを価値付けるのではなく，徐々に理解したこと，説明できるようになったことやその過程を価値付け，達成感を味わわせましょう。

子どもの考えを可視化する板書の例



終 末

Ｑ４　まとめやふりかえりでは何をすればよいですか。

次の学習につなげることを意識しましょう。

まとめ

○　学習課題と分かったことを「他の人にも分かるように」言葉をつなげて，本時のまとめをさせましょう。

○　価値ある呟きや態度をつかみ，価値付け・賞賛することで，よりよい考えを使おうとする意欲や態度を育てましょう。

ふりかえり

○　黒板で学習を振り返ったり，感想を書かせたりすることで，理解を深め，算数・数学のよさ，考える楽しさを味わわせ，「だったら」「次は」「～に使えそう」という言葉を使い，よりよい解決の方法を考えたり，新たな問いを見い出したりさせましょう。

適用問題

○　問題の数値や条件を変えて，身に付けた知識や技能等を使い，別な問題を解くことで，活用するよさを味わわせましょう。

小学校第４学年　算数科学習指導案

単元名「変わり方調べ」（本時：１／５）

指導案の視点

【視点１】主体的な学び

○　考えたくなる問題（提示の工夫）

導入で『不思議な時計』（表12時，裏3時，和が15になるように貼り合わせてある）を提示し，子どもに「表が１時の時，裏は何時？」といった問いかけを繰り返していく。「時刻当て名人」を登場させ，表の時刻から裏の時刻をどんどん言い当てていく。この活動から子どもは，「どういう仕組みなの？」「なぜ名人は言い当てられるの？」といった問いが生まれる。

【視点２】対話的な学び

○　自ら動き出す対話

少人数の交流については，子ども全員が理解していない時，子どもが周りの友達と話したい時，または教師が子どもにもっと議論させたい時など状況を鑑みながら適宜取り入れる。また，友達の発表からきまりを知るのではなく，自分自身の力できまりに気付く喜びを味わわせたい。

【視点３】深い学び

○　見方・考え方を働かせる深い学び

「表に表すことのよさを味わわせること」「関数的な見方・考え方が深まること」を目標に設定し，集めたデータを表に整理して，変化や対応の特徴を見いだすために，伴って変わる二つの数量の縦の関係と横の関係に着目させ，帰納的に考えさせる学習を展開したい。全体交流では，それまでに出された情報（表１時，裏２時など）をカードに書いて，順に並べるのではなく，バラバラに貼っていく。きまりが見えづらいことで，子どもの「整理したい！」「順序よく並べたい！」という思いを引き出し，順序よく並べることで，表と裏の関係が見えてくる。さらに，空いている箇所を考えさせることで，子どもは表を横に見たり縦に見たりする。この一連の活動が，表に表すことのよさを味わわせ，関数的な見方・考え方を伸ばす素地になる。また，本時で学習した見方・考え方を活用する適用問題に取り組むことで，自分の力の高まりや学びの深まりに気付かせたい。

本時案

（１）目標

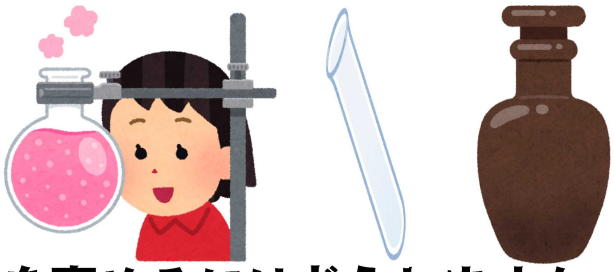
・伴って変わる２つの数量の関係に関心をもち，関係を表を用いて調べることのよさに気づいている。
【関心・意欲・態度】

・伴って変わる２つの数量の関係（和が一定）を表に表し，その関係をとらえる。【数学的な考え方】

（２）展開

学習過程	児童の活動	教師のかかわり	評価規準（評価方法）
導入	○　表の時刻から裏の時刻を当てるゲームを楽しむ。 表が 1 時の時，裏は 2 時だった。 表が 7 時の時，裏は 8 時だった。 表が 4 時の時，裏は 11 時だった。 えーっ！よくわからない？ ○　時計名人が問題に答える様子を観察する。 なぜ，時計名人はすぐに答えられるのかな？ 時計の表と裏の時刻の関係に何かひみつがありそうだ！ ○　めあて　不思議な時計の表と裏の数の関係にはどんなひみつがあるのかな？	・不思議な時計を提示し，表の時刻から裏の時刻を当てるゲームをする。 視点１ 考えたくなる問題 ・時計名人が登場し，教師の問題にどんどん正解を言い当てていく。	
展開	○　今までの情報を整理して，関係を見つける。 表：1，4，7，3，5 裏：2，11，8，12，10 もっと情報が欲しいなあ。 もっと見やすく並べたいな。 順番に並べてみよう。 表：1，3，4，5，7 … 裏：2，12，11，10，8 … 表が 3 だと裏は…。 表が 1 ふえると裏が 1 へる。 空いているところはきっと… 表と裏をたすと 15 または 3 になる。 1 時は 13 時，2 時は 14 時と考えると，表と裏をたすと全部 15 になる。 時計名人はこれらのひみつを知っていたんだ！	・カードは順番通りではなくバラバラに貼る。 視点３ 見方・考え方を働かせる ・気付いたことをノートに書かせる。 視点２ 自ら動き出す対話 ・適宜ペアで交流させ，表と裏の関係に気付かせていく。	関 伴って変わる２つの数量の関係に関心をもち，表を用いて調べることのよさに気付いている。 （発表・ノート） 考 伴って変わる２つの数量の関係を表に表し，その関係をとらえる。 （発表・ノート） ＊横に見たり，縦に見たりすることを促す。
終末	○　まとめ　表と裏をたすと 15 になる。 表が 1 増えると裏は 1 減る。 ○　適用問題 「不思議な時計（表＋裏＝ 13）」の表と裏の関係を見つける。 表：1，2，3，4，5，6 … 裏：12，11，10，9，8，7 … ○　学習の感想を書く。 ○　交流する。	・表に表すことのよさを確認する。 視点３ 学んだことを適用する ・別の不思議な時計（表＋裏＝ 13）を提示し，関係を見つけさせる。 ・学習の振り返りをさせる。	

理　科



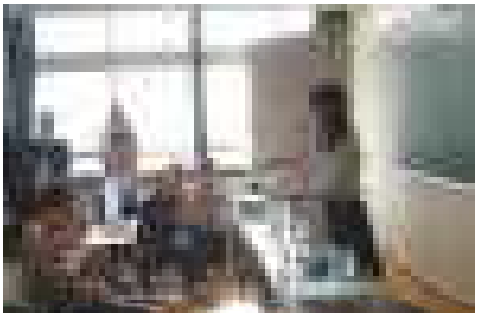
導　入

Ｑ１　子どもの関心や意欲を高めるにはどうしますか。

事象との出会いや問題の提示を工夫しましょう。

事象との出会い

○　子どもが「知っている，分かっている」と思い込んでいることの中には，実は間違っていることや気付いていないことがあることに気付かせ，主体的な問題解決に向かえるようにすることが大切です。そのために，十分な活動の時間を設定し，「あれ？」と思う事象をやってみせたりします。



問題の提示

○　子どもの気付きや疑問などの声を拾いながら子どもたちと対話したり，全体で共有したりしながら問題を設定するなどして，より自分事として捉え，主体的に取り組もうとする気持ちを高めることが大切です。

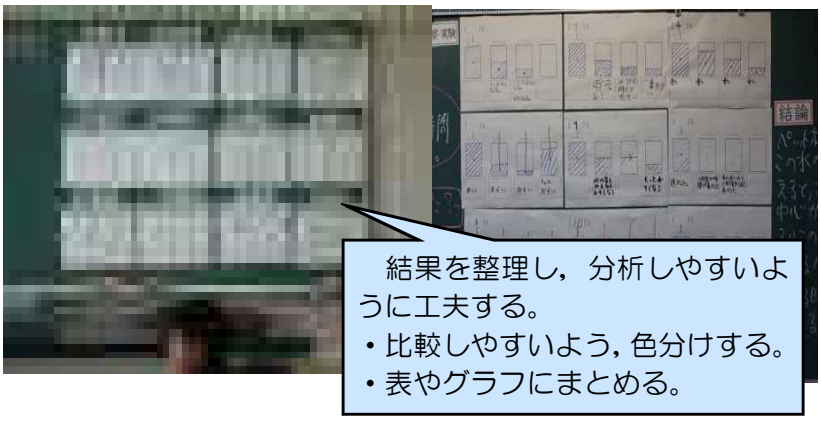
展　開

Ｑ２　観察・実験を，定着につなげるにはどうしますか。

観察・実験の視点を明確にしましょう。

観察・実験

○　観察・実験では，どこに着目し，どのように変化したのかを捉えられるよう，観察・実験の視点を確認し，適切に結果をまとめることが大切です。

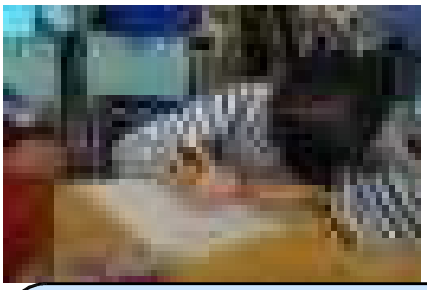


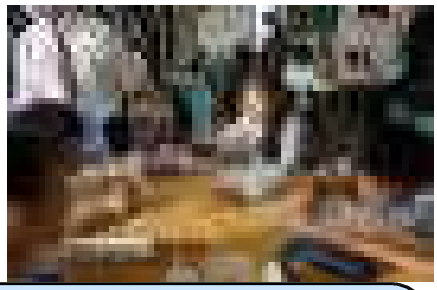
結果を整理し，分析しやすいように工夫する。
・比較しやすいよう，色分けする。
・表やグラフにまとめる。

・何のための実験か？　（目的）
・どこに着目するのか？
・どのように変化したのか？　（視点）

Ｑ３　子どもの思考力を高めるにはどうしますか。

予想や実験方法の立案，考察等を工夫しましょう。





思考力を高めるため，個人で考えた後，グループや全体で交流する場を設けます。

予想

○　「なぜ，そう思ったのかな？」「前にやった時はどうだったかな？」などと問い返し，事象との出合いの場面やこれまでの既有知識等を想起させ，根拠に基づいた考えをもたせることが大切です。

実験方法の立案

○　目的を明確にもち，その結果を考察する実験にするために，子どもたちの考えや実験の視点を明確にし，実験で使いたい物を具体的に思い浮かべさせ，実験の方法を図などで示し，視覚化することが大切です。

ろうを塗り，溶けたところを観察する

考察

○　実験結果からわかったことを捉えるために事実と解釈を分けて考えさせます。事実と解釈を分けて考えさせるために，発問を工夫します。また，自分の実験結果だけではなく，友達の実験結果も合わせて考察することで，観察・実験の結果の客観性を高めることも大切です。

事実→観察・実験の結果から目でみて確認できたこと。
解釈→確認できた事実からわかったこと。

【理科の見方→領域ごとに見られる特徴的な視点】

エネルギー	量的・関係的な視点で捉える
粒　子	質的・実体的な視点で捉える
生　命	多様性と共通性の視点で捉える
地　球	時間的・空間的な視点で捉える

【理科の考え方→資質・能力を育成するための方法・手段】

第３学年「比較」	問題を見いだす力
第４学年「関係付け」	予想や仮説を発想する力
第５学年「条件制御」	解決の方法を発想する力
第６学年「多面的」	妥当な考えをつくりだす力

結論

○　結論を導き出すために，単純に問題の答えを確認するだけでなく，考察をもとに，子どもたちが納得したことを確認しながら子どもの言葉を生かしまとめることが大切です。

終　末

Ｑ４　まとめやふりかえりでは何を意識すればよいですか。

次の学習につなげることを意識しましょう。

まとめ・ふりかえり

○　子どもの発展的な考えを拾い，新たな疑問を見い出したり，実生活とのつながりを意識させたりすることで，次の学習への意欲付けを図ることが大切です。

小学校第５学年　理科学習指導案

単元名「ふりこ」（本時：９／９）

指導案の視点

	【視点１】主体的な学び	【視点２】対話的な学び	【視点３】深い学び
具体的な手立て	**① 既有知識を揺さぶる問題** ペットボトルの中の水の量を減らし，振り子の実験をする。中の水を減らしたことで，子どもたちは，重さが変わっていると考える。しかし，重さと同時におもりの重心も変わっているため，振り子の周期が変わる。子どもたちの既有知識を揺さぶることで，児童はより主体的に思考すると考える。 **② 解決への意欲を高める工夫** 演示実験の前に一人ひとりが実験の予想をする。予想について，立場や根拠を明確にしながら，演示実験をみることで，自分の予想との共通点や相違点を捉えることができ，主体的になると考える。また，自分たちで実験方法を考え，調べることを明確にすることで，主体的な取組となると考える。	**① 対話する場面の意図的な設定** 理科では，問題解決のために実験に取り組む。実験では，友達と対話的に取り組むことが欠かせない。問題を解決するためにはどのような実験を行うのかという実験方法を話し合う。実験では，互いに考えを共有し合いながら，協力して取り組む必要がある。あらかじめ個人で考える時間を設け，考えをもった上で，グループや全体で話し合うことで，より妥当な考えに近付くようにする。 **② 実験結果の交流** 実験の後，実験結果の整理を行い，実験から分かったこと（事実）とその実験からどのようなことが言えるのか（解釈）を全体で対話的に確認する。	**① 既有知識と現象を繋げるため工夫** 児童が今までの既有知識を使い，振り子の往復する時間の変化について自分なりに説明しようとすることが，深い学びへと繋がると考える。説明するために，以下の手立てをとる。 ・既有知識を活用するための復習を行う。 ・「振り子の長さを確認する」という観察の視点を明確にし，実験を行う。 ・演示実験だけではなく，自分たちでも実際に実験をしてみることで，「振り子の長さ」の変化を実感させる。 ・「振り子の長さ」は支点からひもの長さと誤認識を改める。
子どもの姿	**○ 「あれ，どうしてかな？確かめたいな。」** **○ 「予想と違うぞ，なぜかな。」** **○ 「どこに秘密があるのかな。」**	**○ 「どうしたら，問題を確かめられるか相談しよう。」** **○ 「みんなで協力して実験をしよう。」** **○ 「どうしてこうなるのか，話し合ってみたいな。」**	**○ 「なるほど，そういうことだったんだ！」** **○ 「やっぱり，これが関係していたんだね。」** **○ 「それじゃあ，こうしたらどうなるかな。」**

理科の資質・能力＝仮説や実験結果をもとに量的変化や時間的変化に着目し，妥当な考えを作り出す力の育成

本時案

目標

・支点からおもりの重心までの長さが変わると，1往復する時間が変わることを実験を通して実感する。
・振り子の長さは，支点からおもりの重心までの長さであることを理解する。

【自然事象についての知識・理解】

・既習事項をもとに，ペットボトル振り子の運動の規則性について考え，表現する。【科学的な思考・表現】

	主な学習活動・予想される児童の言動	教師のかかわり（◇）評価（◆）
導入	○ 振り子の復習をする。 **T「1往復する時間は何によって変わりましたか？」** ・１往復する時間は振り子の長さで変わった。 ・おもりの重さが変わっても１往復する時間は変らなかった。 ・振れ幅を変えても，１往復する時間は変わらなかった。	◇ 実際にペットボトル振り子を揺らして見せて，既習事項を確認する。また，いつでも確認できるように，掲示物も準備する。
	○ ペットボトル振り子の演示実験をみる。 **T「ペットボトル振り子の水の量を変えて実験をします。往復する時間はどうなると思いますか。」** ・往復する時間は変わる。 ・往復する時間は変わらない。 **T「ペットボトルいっぱいに水を入れた振り子とペットボトルの水を減らした振り子を同時に揺らしてみましょう。」**	◇ 演示実験の前に一人ひとりが予想を立てるよう声をかけ，立場を明らかにする。 視点１　解決への意欲を高める工夫 ◇ 水を減らしたあと，子どもたちにペットボトルを持たせ，重さが変わったことを体感させる。

展 開	・往復の時間はどのくらいになるかな。 ・往復する時間はどうなるかな。 ・水を減らして，重さを変えているから変わらないと思うよ。 ○　問題を見いだす。 ペットボトルふりこの水の量を変えると往復する時間が変わるのはどうしてなのだろうか。 ○　演示実験について話し合い，仮説を立てる。 （個人→グループ→全体） **T「ペットボトルの水を減らして振り子実験をしたら，どうして往復する時間は変わったのかを話し合いましょう。」** ・往復する時間が変わったということは，振り子の長さが変わっているということなのかな。 ・変わった所は，ペットボトルの中の水の量だから，水の量が振り子の長さに関係があると思う。 ・振り子の長さってどこからどこまでだったかな。 ・振り子の長さは，おもりの中心からひもの長さまでだから，水の量が変わるとおもりの中心が変わっているんじゃないかな。試したいな。 **T「どのような所に着目して実験しますか。」** ・振り子の長さが変わったことが分かるように，水の中心に印をつけて実験したい。 ・振り子の往復する時間が水を減らすとどのように変わるのかを調べたい。 視点１　解決への意欲を高める工夫 ○　グループで実験をする。 **T「グループでペットボトルの水の量を変えて実験しましょう。」** ・満タンの時と，真ん中あたりと，少ない時を実験をしてみよう。 ・水を減らしたら，水面が下がったので，おもりの中心が下がっているね。 ・水を減らしたら，どんどんゆっくりと動くね。 視点２　対話場面の意図的な設定 ○　実験結果を交流し，整理する。 **T「各グループの結果をみて，事実とそこからわかったことを整理しましょう。」** ＜事実＞ ・だんだん中の水を減らしたら，往復する時間が長くなりました。 ・水を減らしたら，おもりの中心が変わりました。 視点２　実験結果の交流 ＜解釈＞ ・おもりの中心が変わり，振り子の長さが変わった。 ・往復する時間が変わったということは，支点からおもりの中心までの振り子の長さがかわったということが分かった。	◇　往復する時間をはかるのではなく，それぞれを１０往復まで数えて比べる。 視点１　既有知識の揺さぶり ◇　話し合いから今日の実験で何を確かめるのか問題をつかみ明確にする。 ◇　ふりこの長さは支点からおもりの中心までであるということについて，児童から意見が出なければ，教師から問いかける。 ◇　振り子の既習事項を生かし，往復する時間はおもりの重さには関係ない所に着目させ，おもりの重さは関係なく，振り子の長さに着目するよう促す。 ◇　振り子のおもりの中心はどこになるかを確認をする。 ◇　重さにこだわるグループがあれば，同体積の水と砂で重さを変えた実験ができるよう，準備しておく。 ◆　【科学的な思考・表現】 （発言分析・記録分析） ◇　各グループの結果（事実）を確認し，実験からわかったことは（解釈）はどのようなことかを考えるよう促す。
終 末	○　考察し，結論を見いだす。 **T「実験結果からどのようなことが言えますか。」** ・ペットボトルの水を減らすと，重さも変わっているが，中の水面の高さが変わったことで，おもりの中心も変わり，往復する時間が長くなった。そのことから，容器やひもではなく，振り子の支点から中の水の中心までが振り子の長さとなり，中の水の量が変わると，振り子の長さも変わることがわかった。 水の量を変えると（重さだけではなく）ふりこの長さが変わるので，往復する時間が変わる。 視点３　既有知識と現象をつなげる工夫 ○　振り返りをする。 **T「今日の実験から考えたことやわかったことをまとめましょう。」** ☆　時間があれば，振り子の長さ（支点からおもりの中心）をそろえる実験をする。往復する時間がそろうことを確認する。	◆　【自然事象についての知識・理解】（発言分析・記録分析） ◇　重心が実感できるような教具を提示する。 ◆　【自然事象についての知識・理解】（発言分析・記録分析）

道 徳

授業の前に

Ｑ１　質の高い授業を行うための準備は何ですか。

学習指導要領解説と教材を読み込み，授業を構想しましょう。

ねらいの設定

○　子どもの実態と内容項目の理解に基づいて，ねらいを適切に設定しましょう。内容項目の理解は授業づくりの柱となる部分なので，学習指導要領解説で必ず確認しましょう。

教材研究

○　子どもが自分ごとと捉えられるよう，教材のどこに着目させるのか，深く考えさせるきっかけとなる場面はどこかを考え，発問を工夫しましょう。

※　道徳的価値について，登場人物の単なる心情理解に終始しないようにしましょう。

導　入

Ｑ２　子どもの関心や意欲をどのように高めますか。

子どもの既成概念を崩し，考えたくなる問いを引き出しましょう。

心の構えをつくる

○　まずは，子どもたちの知的好奇心や，よりよく生きたいと思う根源的な学びの欲求を呼び起こしましょう。

　教師は，何について考えさせるのかというゴールをイメージし，子どもの既成概念を崩す「えっ」と思わせるような問いから問題意識をもたせ，内容項目の本質に迫っていくような導入を行いましょう。

展　開

Ｑ３　道徳的諸価値の理解をどのように深めますか。

子どもの反応を生かし，開かれた発問や問い返しを行いましょう。

開かれた発問

○　道徳的価値の深い理解に迫るような発問や物事を多面的，多角的に考えさせる発問，問題場面を自分に当てはめて考えることを促す発問を行いましょう。

○　教材の内容を問うだけの発問や，「はい，いいえ」で答えが限定的になる閉じた発問ではなく，「何ができるか」「○○とは何だろう」と思考が広がっていく開かれた発問を行いましょう。

問い返し

○　内容項目の本質に向かい，深く考え，議論させるために，子どもたちの言葉を受け止めた上で，さらにその発問から発展させるために行う発問を行いましょう。子ども自身が気付き，思考を広げ，道徳的価値を再構築できるよう子どもの言葉をつないでいきましょう。

例　「Ａさんは，なぜそう思ったの？」「Ａさんはこう思ったけど，みんなはどう？」
　　「ＡさんとＢさんの考えで，共通点と違いは何だろう？」

Ｑ４　対話を深めるためにどのような工夫がありますか。

考えの深まりを大切にして，対話の形態を決めましょう。

話し合いの活動

○　人数や座席の配置の工夫，討議形式など形態を工夫して，対話を通じて，子どもの考えが深まっていくようにしましょう。

表現活動の工夫

○　学年で扱う教材，子どもの実態に応じて「役割演技」「動きや言葉の模倣」「実際の場面の追体験や道徳的行為」などの考えやすい・取り組みやすい活動を行いましょう。

Ｑ５　書く活動はどのように取り入れますか。

考えや感じたことを自由に書かせましょう。

書く活動の工夫

○　話し合う前に，考えを書かせることで，自分の考えを整理することができます。

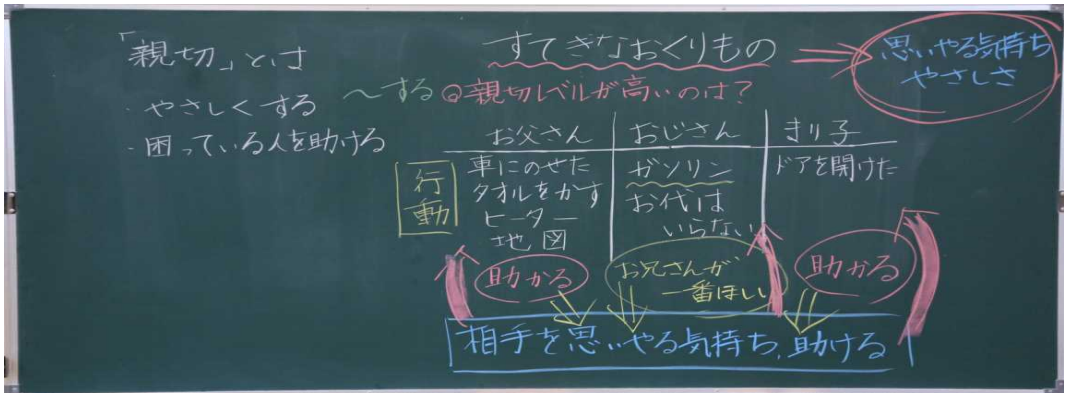
○　授業を通して考えたことを整理することで，自分の考えを深めたり広めたりすることができます。一人ひとりが，考えたこと，感じたことなどを自由に書かせましょう。

Ｑ６　板書はどのように書きますか。

思考の流れや深まりがわかるような，構造的な板書を心がけましょう。

板書の工夫

○　子どもが授業内容や道徳的価値，心情の変化・深まりが把握できるようにするために，構造的な板書を心がけましょう。



←構造的な板書の例

終　末

Ｑ７　まとめやふりかえりではどうすればよいですか。

子ども自身の価値観の変容を確かめさせましょう。

まとめ

○　学びを整理し，現在の自分と他者の価値観を比較させ，価値の再構築を行い，適切な価値付けを行いましょう。

ふりかえり

○　終末では導入と同じ発問を行うなど，導入と終末と関連させ，自分の価値観の変容を実感させましょう。

説話

○　子どもが道徳的価値を一層深めたり，考えを整理したりできるよう教師が意図をもった話をしましょう。

小学校第５・６学年　特別の教科道徳学習指導案

主題名　思いやりを受け継ぐ　Ｂ－（７）　親切，思いやり
教材名　「すてきなおくりもの」
指導案の視点

【視点１】主体的な学び

○　主体的とは，児童が自ら考えたい，学びたいと思うことである。本時では，導入時に「親切」な行為について尋ね，自分だったらどうするかという自我関与の場面を想定することによって，児童の問題意識の醸成を図る。また，本時のテーマとなる「問題」を提示し，児童の考えに対する問い返しを行いながら，新たな疑問や問題点を洗い出すことによって，問題解決に向けた主体的な追究活動へと結び付けていく。

【視点２】対話的な学び

○　児童は，問題解決に向け，頭の中で様々な考えを思い巡らせている。教師の発問を通して他者の考えを聴き，対話的に思考を整理する場合もあれば，ペアやグループでの話し合いを通して，自ら抱えている問題に対する答えを見出す場合もある。本時では，適宜，話し合いをもたせ，問題解決に向かって多面的・多角的な視点から異なる意見を交わし合い，対話的な活動を通じて一人では到達しえない気付きや理解を得られるようにする。

【視点３】深い学び

○　児童は，主体的・対話的な学びを通じて，自らの思考を深めていく。問題解決に向けた多面的・多角的な見方や考え方から，本時で扱う内容項目「親切，思いやり」の道徳的価値について深く考えたり，新たな気付きを得たりすることによって，価値を再構築していく。本時では，教師によるの問い返しや，対話的な活動を通じて，「考え，議論する」活動を展開し，道徳的価値の本質へと迫る深い学びへと繋げさせる。

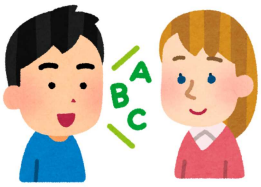
本時案

（１）展　開

過程	□学習内容　○主な発問　・予想される児童の反応	指導上の留意点
導入	○　これまで誰かに「親切」にしたことやされたことは，ありますか。 ○　「親切」にするとは，どんなことですか。 ・困っている人を助けること。 ・思いやりをもって接すること。 ○　困っている知らない人がいたら，自分だったらどうしますか。 □　「親切」とは何かを考えながら，話を聴きましょう。	◆　自己の体験を想起させ，本時への関心を高める。 ◆　「親切」と聞いて思い浮かべる行為について押さえ，価値への方向付けを図る。 ◆　立場を自分に置き換えることによって，本時の課題への意識を高めさせる。 ◆　課題意識をもって話を聴くように留意させる。
展開	「親切」とは，どのようなことだろうか。 □　「すてきなおくりもの」の範読を聴く。 ○　この話の中で，親切レベル（より親切だと感じる行為・行動など）が高いのは誰ですか。 ・お父さん　・おじさん　・まり子 □　それぞれの「親切」を整理して，比べてみましょう。 お父さん｜まり子｜おじさん 行動　声をかける ヒーターを入れる｜車に乗せる タオルをかす｜ガソリンを買う 一番欲しいものではない　お兄さんの欲しいもの ○　自分が「お兄さん」の立場だったら，うれしいのはどれ？ ・どれもうれしい。 ○　それぞれの「親切」の行動は違うのに，どれも「うれしい」のはなぜでしょう。また，共通するものは何でしょうか？ ・お兄さんを助けようとする気持ち ◎　「すてきなおくりもの」とは，何でしょうか。 ・相手を思いやる気持ち ○　この話の中で，うれしい気持ちになった人はだれでしょうか。 ・お兄さん ・お父さんやまり子も，うれしい気持ちになれた。 →トラックのおじさんは，どうだったと思う？ ・お父さんやまり子と一緒（うれしい気持ち） →新聞の投書を読んだ病気の祖母やまり子の母は，どうだった？新聞を読んだ他の人たちは？ ・みんながうれしい気持ちになれた。 ○　「すてきなおくりもの」をもらったのは，だれでしょうか。 ・登場人物全員 ・この話を知ったみんながもらった。	◆　登場人物の「親切」な行為について問い返し，価値への方向付けを図る。 ◆　それぞれの親切な行為について，比較しながら考えることによって，価値の本質へ迫る手がかりとする。 ◆　相手の置かれている状況に自分自身を置き換えて想像できるようにする。 ◆　共通するものは何かを問い，行為の内容ではなく，行為の深層にある価値について考えさせる。 評　親切にしようとする心情について深く追究しているか。 （発言・表情・ノート） ◆　価値の本質を押さえた上で，親切な行為が，人々の心をどのように変化させるのかを捉えられるようにする。 ◆　物語を通して「親切」や「思いやり」の意義を再確認し，価値の本質へ向かおうとする児童の考えを意味付けする。
終末	○　「親切」とは，どんなことですか。 ・相手を思いやって行動すること □　本時を振り返りながら，本時で考えたことや思ったことをノート（ワークシート）に書く。	◆　本時の課題について問い直し，価値の本質に気付かせる。 評　「親切，思いやり」の意義を理解し，今後の生活に生かそうとしているか。(ノート)

（２）評　価　　誰に対しても思いやりの心をもち，相手の立場に立って親切にしようとする心情について理解を深めることができたか。

外国語



導 入・展 開

Ｑ１　授業のはじまりはどのように進めますか。

自然と英語の世界に引き込み，主体的に取り組めるようにしましょう。

あいさつ

○　英語でのあいさつを通して，日本語の世界から英語の世界に子どもたちを引き込みましょう。毎回，繰り返し行うことで，英語らしい音の流れを自然と学ぶことできるようにすることが大切です。

○　曜日や天気など，様々なやり取りを取り入れましょう。

本時のめあて

○　「めあて」に関わる本時の「目標となる表現」などを教師が唐突に提示したり，話すのではなく，子どもが主体的に取り組めるよう工夫することが大切です。

予想・たしかめ

○　指導者と子どもや，子ども同士の言語活動でのやり取りの中で，一人ひとりが，本時の目標表現を類推したり，気付かせたりさせながら，本時のねらいにむけて確認していくことが大切です

Ｑ２　ウォームアップのポイントは何ですか。

意味のあるやり取りをし，英語の音と意味を結び付けさせます。

ウォームアップ１　sit down game, small talk など

○　自分の気持ちや思いを話させ，「意味のあるやり取り」にしましょう。自分自身に関する出来事や気持ちなどについてやり取りをし，自分ごとの言語活動になっているかが大切です。

○　「何と言ってるのだろう」という思いや疑問を大切にしましょう。音声による英語表現と意味とを，子どもが気付き，理解していくことができるよう丁寧にインプットすることが大切です。既習表現を繰り返し使用し，定着を図れるようにしましょう。

ウォームアップ２　歌・チャンツ　など

○　頭を働かせながら聞いたり，歌ったりさせましょう。活用するタイミングや目的を明確にし，問いかけを通して，聞く必然性を高めることが大切です。

○　英語独特のリズムやイントネーションを自然に身に付けさせましょう。歌では，文章と同様に途中では区切らず，全体（フルセンテンス）を聞かせることが大切です。

○　ウォームアップの活動では，できるだけ本時の「目標となる表現」との関連を図りましょう。

Ｑ３　元気よく英語を話させるにはどうしますか。

対話の目的を明らかにし，子どもの考えをつなぎましょう。

本時の目標となる表現

○　頭を使って，心を動かし，「聞きたい」「やってみたい」という言語活動にすることが大切です。言語活動を自分ごとと捉え，意味のあるやり取りにすることが大切です。

○　子どもの様子をしっかり見取り，丁寧なインプットからアウトプットにつなげることが大切です。

○　無理なアウトプットによる，苦手意識をもたせることがないようにしましょう。

○　同じ表現の繰り返しなど，言語活動が単調にならないようにしましょう。

文字あそび

○　文字に自然に慣れ親しませましょう。視覚からの情報と，「聞く，話す」との概念を結び付けることが大切です。

○　様々な言語活動の中で，自然と慣れ親しませることが大切です。

終　末

Ｑ４　どのようにふりかえりをさせたらよいですか。

学習の流れをを確かめながら，力の高まりを感じさせましょう。

まとめ・ふりかえり

○　本時の「目標表現」などを，教師が唐突に提示したり，話すのではなく，子どもとの言語活動を通して，子どもとともに確認しながらまとめていけるよう工夫することが大切です。

その他

ALTの特徴や，各領域のポイントを生かした授業をデザインしましょう。

ティーム・ティーチング

○　学級担任がコーディネーターとなり，授業をデザインしましょう。ＡＬＴと学級担任等で，英語でのデモンストレーションを行ったり，ＡＬＴと子どもが直接会話する機会を提供したりして，「英語が使えた」という経験を大切にし，ネイティブ・スピーカーの発音を聞かせ，自然な表現のインプットをしましょう。

聞くこと

○　全ての言語活動の基本となる始まりの活動です。豊富に英語を聞くことができるようにしましょう。目標設定を大切にし，楽しみながら，必然性をもって聞けるようにしましょう。

話すこと

○　子どもの「知りたい」という思いを大切にして，目的をもった話す活動にしましょう。同じ言語材料でも，話題を変えながら繰り返し行い，定着を促します。最初から正確な発話を求めず，多くの子どもに共通する誤りは，全体で指導しましょう。

読むこと

○　目的をもって推測しながら読む言語活動を設定し，音声で十分慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を読ませましょう。スモールステップを基本とした指導を行いましょう。

書くこと

○　目的をもって取り組める言語活動を設定し，音声で十分慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書かせましょう。英語の語順への意識を高め，語と語の区切り等に注意して英文を書かせましょう。

小学校第６学年　外国語活動学習指導案

単元名　Let's go to Italy.

指導案の視点

【視点１】主体的な学び　「思いを伝える活動」「類推しやすい活動」

○　「主体的な学び」については，ただの「音声」のみのやり取りではなく，「自分の思いや気持ちを表現したい」「聞きたい」という思いをもった言語活動である「意味のあるやり取り」が行われているかが，重要となります。

【視点２】対話的な学び　「目的をもったやり取り」

○　「対話的な学び」については，外国語表現を聞きたくなるような，話したくなるような聞くことや話すことのへの「必然性のある活動」の中で，さらに「目的をもったやり取り」が行われているかが，大切な視点となります。

【視点３】深い学び　「表現を整理・活用する場面」

○　外国語における「深い学び」については，「主体的な学び」や「対話的な学び」が土台となります。それらを土台として学んだ外国語表現を活用する場で，知識・技能をより確かなものとして身に付けさせていくことなどが大切な視点となります。

本時案

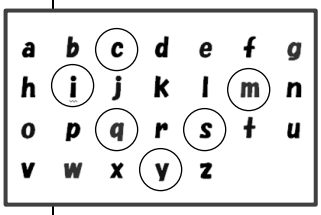
（1）目標

・自分の思いが伝わるように思考しながら，行きたい場所について聞いたり話したりしている。
（コミュニケーションへの関心・意欲・態度）

・行きたい場所について，尋ねたり言ったりする表現に慣れ親しむ。（外国語への慣れ親しみ）

（2）展開

学習過程	児童の活動	教師の関わり	□評価規準（評価方法）
導入	○　挨拶をする。 ○　今日の曜日，日付，天候を答える。 ・曜日の歌を歌う。 ・今日の曜日，日付，天候を答える。 【Sit Down Game】 ・Hi, friends!2 P14-15 の町の地図の中で，お腹がすいたとき，自分が行きたい場所を考える。 ・その場所を尋ねられたら，「Yes」と言い，手をあげる。	・歌い始めの曜日をかえたり逆から歌ったりするなど，色々な歌い方で歌う。 ・絵カードで表現を確認しながら，今日の曜日，日付，天候を尋ねる。 ・児童を全員起立させて質問する。 ・お腹がすいたとき，自分がどこにいきたいかを尋ねる。 ・質問内容に該当した児童（手を挙げた児童）を，場所を復唱し座らせていく。	
	教師：Where do you want to go?　Who wants to go to the convenience store? 児童：Yes.（手を挙げる） 教師：You want to go to the convenience store. Please sit down.		
展開	○　めあて 行きたい場所を尋ねたり，言ったりする。	（児童に提示しない）	
	○　もう一度修学旅行に行けるとしたら，どこに行きたい？ ・クイズに答える 担任，校長，教頭の行きたいところを，その場所で見たいものや食べたい物をヒントに当てる。	〈ヒント例〉 I want to go to the Colosseum. I want to see soccer game. I want to eat pizza and spaghetti. Where do I want to go?	視点１　思いを伝える活動 慣　行きたい場所について聞いている。（観察）
	・４線紙に記入された担任，校長，教頭が行きたい場所の中で，自分も行ってみたいと思う場所を先生が読んだ後に続いて言う（読む）	・４線紙に担任，校長，教頭の行きたいところを書き，投影機で映し出す。 I want to go to Okinawa. I want to go to Kyoto. I want to go to Italy.	
	・行きたい場所（国内）について考え，尋ねたり言ったりする。	・数名の児童に，I want to go to Italy. Where do you want to go? と個別に尋ねていく。 ・Sapporo や Tokyo，Osaka など,児童が行きたい場所を単語だけで答えた場合は，You want to go to Sapporo.	視点２　目的をもったやり取り 慣　行きたい場所や国について，尋ねたり言ったりしている。（観

	・先生と一緒に友達に質問してみる。Where do you want to go? ・４線紙に自分の行きたい場所を記入する。 I want to go to 国内の場所. ・先生の後に続いて言う（読む）（自分が４線紙に記入した文章のときのみ） ○　週末に行きたい場所はどこ？ ・校長，教頭，担任の週末に行きたい場所を尋ねる。 ・友達とペアで週末行きたいところを尋ね合う。 ○　abc ソングを歌う。 ・板書に合わせて，abc ソングを歌う。 ・「チューリップ」や「かえるの歌」など，別の歌で歌ってみる。 ・右から左へ，右上からそのまま下へ，など読む順番を変えて歌ってみる。 ・丸で囲われた文字を抜かして歌う。	とフルセンテンスで復唱し，次に答える児童のモデルとなるようにする。 ・他の児童に対し，教師と一緒に質問するよう促したり，募ったりする。 ・時折別の児童に，友達がどこに行きたいと言ったかを尋ねたりし，聞かなければいけないといった緊張感をもたせる。また，ここでも復唱しインプットにつなげる。 ・手本を示し，児童がスムーズに書けるようにする。 I want to go to Tokyo. I want to go to Osaka. I want to go to Hiroshima. など ・児童に Where do you want to go?と質問させ，校長，教頭，担任行きたい場所を児童に答える。（尋ね合う表現を確認させる） ・隣の席の児童と尋ね合わせる。 ・数名の児童に，隣の席の友達がどこに行きたいと言ったか尋ねる。 Where does he/she want to go? ・文字指導（小文字）を行う。 ・歌を口ずさみながら板書していく。いっしょに歌を口ずさむよう促す。 ・児童をリードしながらいっしょに歌う。 ・g,f,e,d,c,b,a, n,m,l,k,j,I,h･･･の順で歌わせたり，g,n,u,f,m,t,e,l, s,z, d,k,r,y,c･･･の順で歌わせたりする。 ・児童をリードしながらいっしょに歌う。 	察） 視点１　思いを伝える活動 視点3 表現を整理・活用する場面 コ　自分の思いが伝わるように，積極的に行きたい場所について聞いたり話したりしている。（観察）
終末	○　今日の学習を振り返る。 本時で学習した内容を話し合い，全員で確認する。 ・担任の質問に一斉に答える。 ○　あいさつ	・児童に今週末行きたい場所を再度質問し，一斉に答えさせる。 ・That’s all for today.	

※　児童が，本単元で使われる外国語表現の言い方や意味を推測したり，どうすれば相手の思いが理解できるか，どうしたら相手に思いが伝わるのかなどを考えたりしながら学ぶことができるようにするため，めあての提示をあえて行わないこととした。

2　校内研修の活性化に向けて

校内研究

校内研究で子どもを変えよう！

校内研修は組織で！提案は現状把握から！

子どもの実態把握

● 自校の子どもの実態を把握し，それに基づいて，子どもに身に付けさせる力や目指す子ども像を全教職員で共通理解することが大切です。

職員集団の意識の向上

● 学校には，経験年数に関わらず，研究に対する教員間の意識の差が感じられる場合があります。
　研究担当等は，これらの実態をしっかり把握し，教職員間の意識の差を埋めるために，目指す子ども像や研究の進め方等の共通理解を図りましょう。

校内研究の提案

　校内研究がうまくいくかどうかは「提案で決まる」とも言われています。提案には，「研究の内容や方法を理解してもらう」「研究担当等の思いや考えを理解してもらう」「実践行動を起こしてもらう」などいろいろな目的があり，それらをうまく伝えるための様々な手法があります。

年度始めの提案

・年間の流れを把握するために，時系列で提案
・新しい研究内容について話す前に，これまでの研究の流れなど過去のことも丁寧に説明

実践期での提案

・結論や論点を明確に提示
・いつ，どこで，何をする等具体的にやることを提示
・個人，係，全体等のやるべきことを明示

研究担当者の「生の声」です。参考にしてください。

★　研究部だよりを**定期的**に発行し，「情報の共有」，「動機付け」，「スキルアップ」を図っています。

★　校内研修は，毎回１時間と**制限時間**を決めています。どんなに協議が白熱していても，時間でスッパリ切ります。

★　研修日には，研究担当者が研修のねらいを明確に示してから研修をスタートしています。

★　全員に役割分担をし，活躍の場を用意しています。
そして，同じ目的に向かうために，「**子どもの変容**」を意識してアナウンスしています。

校内研究Q&A

Q1　校内研究を自分ごとにするには？

事前研や事後研の工夫

○　校内研究の目的は，日々の授業改善です。しかしながら，公開授業が目的になり，授業者だけが自分ごととなっていることはありませんか？
　そんな時には，例えば，指導案検討時に模擬授業をやってみたり，その指導案で授業者以外が授業をしてみたりするなどの事前研や，ワークショップ型の研修（事後研等）を実施する場合には，授業者だけの改善に留めず，「課題についての自己の振り返り」として，自分の課題，改善策を検討，言語化してみましょう。そして，グループ内で共有し，感想を交流するなどして，明日からの授業でどうしたいかを一言発表するところまで行うことで，全員にとって自分ごととなります。

※　ワークショップ型研修の詳細は，平成２８年函館市学習状況調査実施　報告書　P.８参照

校内研究のPDCA

効果のある取組を進めている学校では，教科や学年・校種を超えた教員の共同研究が推進されています。校内研究の進捗状況を確認しながら検証・改善することが大切です。

Q2　授業改善を進めるには？

子どもの学びの姿・授業像を共有

○　授業の主役は子どもです。「主体的・対話的で深い学び」の視点から目指す子どもの学びの姿を各学校で共有しましょう。その姿になるためには，どんな工夫をすれば良いかを話し合うことで，各学校の授業像が決まります。明確な授業像ができれば「型にこだわる」，「教師主導」等の授業ではなくなります。また，そのことによって，授業づくりの時に同じ視点で協議ができるため，発問や問い返しの精度も上がっていきます。

　また，①　同じ指導案で複数の教員が授業をする　②　１人の教諭が同じ指導案で他の学級で授業をする　など同じ指導案を使って協議をすることで，授業のブラッシュアップができます。

※　授業づくりの詳細は，平成２８年函館市学習状況調査実施報告書　　P.９参照

Q3　教科・校種の壁を超えて研修を進めるには？

研究（手立てなど）を通じて，目標が達成されているか協議

○　共同研究には，多様な視点からじっくり協議することが大切です。教科の専門性だけではなく，目標が達成できているかどうかの視点で，その教科の学習指導要領解説等を持ち寄り，教科のねらいや指導内容を確認しましょう。他教科のねらいや指導内容を知ることは，自分の教科にも活用できます。

※　教科・校種を超えた研修の詳細は，平成２８年函館市学習状況調査実施報告書　P.１０参照

Q4　研修の時間を確保する方法は？

まとまった時間を確保しようとしない

○　校内研究を推進するためには，教師が本音で話し合い，全教師で授業改善に取り組むことが大切です。しかし，長時間の時間を確保することは，難しくなっています。

　そこで，前ページにもあるように，時間を制限する，ミニ研修会を設定する，研修の内容を事前に伝え，見通しをもってもらい短時間にするなど各学校の実態に応じて工夫することが大切です。校内研修の充実を図ることが，校内研究が全員にとって自分ごとになる手立ての一つとなります。

※　校内研修の充実については，平成２８年度函館市学習状況調査実施報告書 P.１１参照